

マ-キ-の

こんな

★
会

★
議

を

見た!!



第1回「なつかしい未来をカタチに! 商品アイデア・ワークショップ in 陸前高田」

ミーティング・ファシリテーター 青木将幸

みなさん、こんにちは。ミーティング・ファシリテーターの青木将幸です。日々、いろいろな市民生活団体やNPO/NGO、地域の団体などの会議を進行させていたどくのが僕の仕事なんです。実際にさまざまな会議のスタイルというのがあります。この連載では、僕が見た（もしくは進行した）いろいろな分野の会議をレポートします。みなさんの団体での会議進行に役立てるとうれしい限りです。

さて1回目の今回は被災地での復興にまつわる会議をレポートします。その名も「なつかしい未来をカタチに! 商品アイデア・ワークショップ in 陸前高田」。今回の会議の主催者は、「なつかしい未来創造株式会社」です。

ご存知の方も多いかと思いますが、陸前高田は東日本大震災の津波の影響を大きく受けて、市街地は市役所や防災拠点もろとも流されてしまいました。それは同時にたくさんの命や、生活の場や、雇用の場を失うことでもありました。被災から1年近くが経ち、地元の商店をやっている事業主さんや、東京でソーシャルビジネスを

展開している方々が力を合わせ「なつかしい未来創造株式会社」を設立。地域の自然や伝統などを生かしながらも最新の技術や考え方を取り入れた「なつかしい未来」をキーワードに新しい事業や、雇用を起こしてゆこうとがんばっています。

1回目のワークショップが開かれたのは2012年2月13日のことでした。呼びかけに応じた39名が、地域の公民館に集結。味噌・醤油屋さんや、自動車学校で働く人、地元の印刷業者さんや、復興のために移り住んできた若者、林業家や家具職人などが地元から集まってきました。東京からはバイオマスエネルギーの専門家や、デザイナー、広告代理店の人、はるか遠く今治からタオル屋さんも駆けつけました。地元の人も、ヨソモノも一緒にあって、わいわいと、新しい事業や、商品、サービス、働き場などを考案しました。3時間のワークショップで出たアイデアは50個を超えました。

この会議の特徴は大きく3つ。

● 1 資料なし

● 2 宿題あり

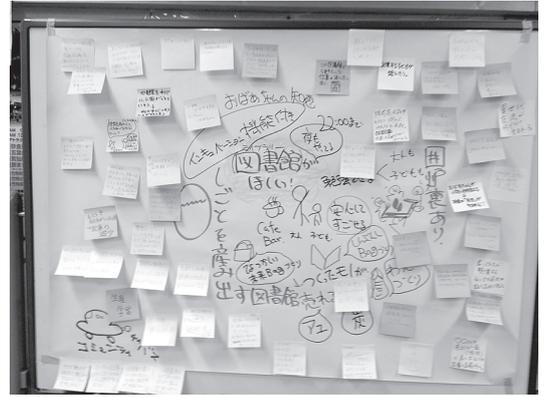
● 3 全員でアイデアを育てる

● 1 資料なし

通常の会議だと、「まずは用意した資料の説明から……」と始まるのでしようが、今回は一切の資料なし、腹案もなし。まったくのゼロの状態から全員でアイデア出しを試みました。まずは、集合時間の15時。全員がぐるりと車座に座って、ひとり一言話すところから始まります。スタートの話題は「なつかしい未来と聞いて、私がイメージすることは？」です。全員がA4の紙にキーワードやイメージを書いて、発表してゆきます。皆がこの地域でどんな未来をつくってゆきたいかのイメージをおおむね共有したところで、ランダムな4人組を結成。その4人で、「なつかしい未来を実現するために、陸前高田でどんな事業、商品、サービス、雇用の場をつくれるとよいか？」をテーマにアイデア出しをしました。

● 2 宿題あり

そこで合計50個以上のアイデア



公民館の和室を使用しているワークショップ。
さまざまなアイデアが模造紙にまとめられていく。

が出たので、すべてをカードに書き込み、皆でそれを眺めます。そして「よし、私はこのアイデアの実現にかかりたい！」と思うものを拾い上げてもらい、「私も一緒に、そのアイデアをカタチにしたい」と志を同じくする方とチームを組んでもらいました。都会の子どもたちを呼んで体験型のツアーリズムを考えるチームや、気仙大工が作った家を売り出すためにモデルハウスを考えるチーム、地域の方が集まって仕事のやり方を教わりながらそれを販売してゆくインキュベーション機能を有したライブラリー、はては地域商社も立ち上げよう、というチームまで立ち上がり、合計4つのプロジェクトが成立。

1回目のワークショップが終わったところで、宿題が出されました。1回目のワークショップと2回目のワークショップの間で集まったりメールリングリストでやりとりするなどして、企画書をしてあげてくる、というものです。あらかじめ用意された資料はなく、その場で立ち上がったアイデアを実現化する作業が宿題となりました。

● 3 全員でアイデアを育てる

2月29日に開催された2回目のワークショップでは新たに7人の参加者が加わったので、各チームに合流。それぞれのチームから宿題の発表がなされます。出たばかりのアイデアというのは、種から発芽したばかりの苗木のようなもの。「そんなの駄目」とか「できないよ」と言って潰してしまうのは簡単ですが、そうしないように「発表されたアイデアを、全員で育てるように」発言するよう、促しました。具体的には「もし、そのアイデアがうまく実現化したら……陸前高田にどんな風景や会話が起きているだろうか？」という切り口で、全員にシナリオを書いてもらったのです。グループからの発表を聞いたら、全員で、それがうまくいった光景を書いて、言い合い、アイデアを膨らませてゆきます。

こうやって2回のワークショップを経て、4つのプロジェクトのイメージが膨らんだところで、いったん終了。今後は、それぞれのプロジェクトを「なつかしい未来創造株式会社」が中心となつ

あおき・まさゆき
1976年、和歌山県生まれ。国際青年環境NGO・ASEED JAPANにおいて、環境問題の解決に向けた活動を展開しつつ、「それぞれの持ち味が発揮される組織づくり」「学びあい、育ちあう場づくり」に関心を寄せる。2003年に青木将幸ファシリテーター事務所を設立。以来、「会議を変えれば、社会は変わる」をモットーに、様々なシーンで参加型会議の進行役をつとめている。



て、参加したメンバーと一緒にくりあげてゆくことが確認されました。

被災地での会議のファシリテーションのポイントは「緩急をつける」ではないかと思えます。全国的な関心が高いうちに、なるべく早く復興を急ぎたいものです。同様に、じっくり落ち着いて、本当のところ、この地域に必要なものは何なのか？ この土地にあったやり方とは何なのか？ 自分たちは何を大切にしてゆきたいのか、を見つめ直す両面が肝要かと思えます。